
レジェンド・オブ・トリニティー

シン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レジェンド・オブ・トリニティー

【Nコード】

N2480B

【作者名】

シン

【あらすじ】

少年は名前以外の記憶ほとんど失っていた。だが一人の男と少女が彼を救った。だから戦う。竜と共に、二人のため、世界のために。

プロローグ

プロローグ

シド・ファニスという人間は、ふつうとは少し違っていた。とゆ
うか、考古学者は皆少し違っていた。特にこの男は、旅に出ても、
すぐ帰って来てまた旅にでる、だから町では、「ふらつきシド」や、
「暇人シド」などと呼ばれていた。だが彼はふつうとは違った。天
才なのだ。伝説の鳥、フェニオンの羽を見つけたり、神が人ではな
いことを実証したのは、彼だった。しかもこの国、ラバーンの国王
レオン・シュナイダーとも親しいというとてもない人物だった。
国王にはリリアという娘がいた。彼女は、まだ十五ながら大陸一美
しいと評判で、婚約を申し込む王子が後を絶たない。だが、首を縦
には振らないという。だが女には興味がないシドも、興味を持った
くらいの美しさなのだ。

さて、一人を除いて、主要人物を紹介したところで、有名な「竜
の詩」を紹介して物語を始めようと思う。

竜が目覚める時

この世は変わる

光に導くのが竜なら

闇に導くのも竜なり

だがどちらでも

美しい

一話少年と老人

少年には何も無い。最初からなかったわけではないが、今はなかった。自分はなんなのか、どこから来たのか、何も分らず考えていた。そのうち疲労が襲い、その場に倒れてしまった。

気づいたら、小さなベッドで寝ていた。疲れは取れていたが、体中が水と食べ物を要求していた。少年は、起きて自分の今いる所を把握しようと思った。周りはたくさんの本で埋め尽くされていて、何よりとても暖かい部屋だった。少年は本を手にとって読んでみたが、意味の分らない記号や文字ばかりなのでよくわからなかった。ほかも読んで見たが同じだった。

本を戻そうとした時、奥のドアが開き、六十歳くらいの白い顎ひげを生やした老人が入って来た。

「その本が気に入ったかね」

彼は、老いているとは思えない生き生きとした声で言った。少年は慌てて戻すと

「すみません。勝手に読んでしまつて」

「よいよい。腹が減つとるじゃろ、これを食べなさい」

老人はパンとスープをテーブルの上に置くと、少年の横に座った。むさぼるように食べる少年を見て、苦笑した。

「よく食べるのう。ところで、君の名前を聞いていいかな？」

「シオンです」

「下は？」

シオンは少し考えると

「すみません・・・実は、分らないんです。てか、自分がだれかもどこから来たのかも、なにも覚えてないんです」

彼は静かに言った。老人はしばらくシオンの顔を見つめると、口を開いた。

「そうか・・・そうかわしはシド・ファニス、考古学者じゃ。しか

し・・・君はそんなに美しい顔をしているのにその裏に影を宿しているとは」

彼も静かに、だが心を込めて言った。

「ところで・・・わしに考えがあるのだが、どうだい、一緒に暮らさないかい？」

老人は優しく言った。シオンは驚いて目を丸くした。

「えと・・・あの・・・だめですよそんないきなり！」

声を荒げたことを反省しながらも、シドの顔を見つめていた。

「いやいやそんな驚くこともない、わしも年をとるとだんだん一人もさびしくなってきた。ちょうどよいのだよ」

「でもやつぱり・・・」

シオンはまた考えこんだ。自分もひとりには寂しい、だがこれ以上迷惑をかけられない。

こんな思いが彼の頭を駆け回っていた。

「行くところもないだろう、いきなり暮らそうとはいえないが、せめてしばらく泊まっていきなさい」

シドのその優しい目を見ると、シオンは断れない気がした。

「わかりました、しばらくお世話になります」

「そうかね、いやあなんだか楽しくなりそうじゃ」

「よろしく願います」

「いやこちらこそ・・・おっと、忘れとった、君はいくつかのう」

「十五です、十一月二十日が誕生日です」

シドは壁に貼ってあるカレンダーを見た。

「おお、明日か」

「あの・・・何かあるんですか」

「おお、君は知らないんじゃないですか、この国ではな、十二月三十一日まで十六になると国王から招待状が来る、いや来るかも知れんのじゃよ」

「来るかも？」

「城の中に特別な魔力がかかった像があつてな、誕生日に城へ報告

の手紙を送るんじゃないが、その像は手紙を審査するんじゃないよ、力ある者をな」

「力ある者・・・でも、手紙でどやって判断するんですか」

シオンが言った時、シドは立ち上がり時計を見ていた。

「もうこんな時間か、そのことは明日話そう君はもう寝なさい、となりの部屋にベッドがあるからそこを使ってくれ」

シオンはしかたなく了承して出て行くとした、その時シドがシオンを呼び止めた。そしてにっこり笑うと言った。

「おやすみ・・・シオン」

優しすぎると思った。それもただの優しさじゃない、心に響くものがあった。シオンも天使のような笑みで言った。

「おやすみなさい・・・シドさん」

少年は、自分はなにもなくはない、何より大事な人を理解する心をもっているところの日実感した。

一話少年と老人（後書き）

無茶苦茶な展開ですいません。できれば感想やこうしてほしいなど
ありましたら、コメントをお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2480b/>

レジェンド・オブ・トリニティー

2010年10月20日03時04分発行